

だしくあくドライバーは極めて例外的な数にすぎない。起った事故は印象的ではあるが、あくまでも不幸な例外である。無理と油断さえしなければ、くるまは極めて安全確実かつ快適なもので、更に取業上の効用が加われば全く申し分のない道具と云えよう。

## 月面の地形

式 正 英

アメリカのレインジャー・ロケットの打ち上げやソヴィエトの月の裏面撮影の成功などで月も身近な存在になってきたものだとぼんやり考えていた程度私のところ、朝には思ってもいなかったことが突然にふりかかってきた。昨年8月1日、共同通信社科学部から「レインジャー7号が月面の近接写真撮影に成功しましたが、その写真が今日の午後1時にNASA(U.S.A. 航空宇宙局)から発表になります。ご覧になりませんか。」という電話があった。自分の専門にもたいして関係ないし、ワシントンで発表されるものをどうやって観るのかも判らず、着突で訳のわからぬ話だと思ったが、始めてみられる筈の月面の細部の地形には何とも言い知れぬ興味を誘われて、つい同意の返事をしてしまった。その日は、夏休み中のことさら暑い土曜日の午後であったが、日比谷公園の中にある料理屋の2階にカンズメにされて、その発表を待った。

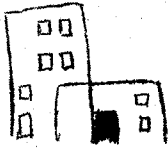
NASAで午後1時に発表された写真は、そのまま電波によって、日本の、いや、世界中の主要通信社や新聞社に電送され、1時10分頃には現像焼付された写真をこの場所で手にすることができるという。もっとも月面の撮影開始から衝突までの瞬間がテレビに受像される時代なのだ考えれば理解はできるが、しかもその写真と解説記事がその日の都内夕刊紙を賑わす筈だという。私共のふだんの生活感覚からは信じられない様なスピーディな話だったが、とにも角にも、輪転機の吼るダイナミックな轟音の世界に身ぐるみひきずりこまれてしまった様な思いだった。

結局、オノ報の写真を手にしたのは、午後2時少し前、曇りの残っている印画紙の写像は、撮影開始向もなくの2080km、770km上空のもので、天体望遠鏡でも捕捉できる程度である。月面図で位置同定を行ってみたら、ルビニエツキー山やゲーリック山が認められる。それから数枚送られてくる順に従って、月ロケットが「雲の海」の平坦部へ指向しながら突入し

てゆくことが知れた。最後に入った2枚は左巻であった。特に衝突時のものより、衝突前2.3秒、5,000m上空からの写真は実に見事であった。平坦部と考えられていた海の表面が、夕方の斜陽をうけて陰影があやなし、ブクブクしたゆるやかな稜や円形の盛り、小突起に富んでみえるのである。これは全くの新知見であった。初めて見る月の肌の異様さ。昨日までは人類の誰も知らなかった形象だと思えば、暫く感激と興奮からは抜けられない。映像の感じは陽光のさす波打際に近い浅海底をのぞいた時の様に、きらきらして頼りないものであった。直ぐには何とも判断のつかぬ地形に早速当惑したが、明暗の濃淡の指示する所に従ってみる特徴は、大小様々の円形のつくるパターンと円の中心に明又は暗の点を持つことだ。覆送されて来た説明文によると、これがクレーター（月面の円形凹地の意）で、この写真に撮影されている最小のもの直径は9m、深さ3m、円みをおびた肩を持つ浅い穴だという。ためつすがめつ単眼視をしたり、眼を細めたり、単写真をみる要領で見ると、雨だれに穴を開けられた雪どけ時の堆雪の表面に近い感じである。穴には円形の輪郭で深さを示す鋭い影のものと、浅さを示す鈍い影のものがあがり、ゆるやかな円形起伏の頂点に位置するものが目立って多い。これを地球上の地形になぞらえればコニーテとホマーテの中間の地形に近い。円錐火山の様に裾野をひかず規模も小さい。併しホマーテの爆裂口ほど山体に比べて大きくはない。写真の左上の南北径200mのクレーターではベロニーテの様な突起が認められ、平面的に二重の同心円構造である。これについてコペルニクス火山からの噴出物の破片が突きささったものだという説明文がつけられた。

ゆるやかな円形起伏やひだは何んであろうか。これが月の表面の硬さを示すものだと考える人もあり、地上の風成砂丘の様な地形だと考える人もいる。ゆるやかな円形起伏と円形輪郭の穴とが関連した位置にあることや列状にならぶクレーターのあること。クレーターの直径の大小は必ずしもコペルニクス火山に関連して分布していないことをならべて考えてみると、隕石や火山弾の衝突の様な無作為偶然の現象とは思えない。やはりクレーターの成因は内部からの圧力による火口か爆裂孔という説が有力ではないかと思われる。

併し鋭い影を持つ円形火口は何時できたのであろうか。地球の場合の様な厚い空気層による調節のない月面は、太陽光の直射によって昼夜の寒暖の差異は著しく、月面の岩石が熱によって剝離分解することは容易に想像される。地球重力の $\frac{1}{6}$ とは云え重力による物質輸送や崩落も免かれまい。海面の様な一様な基準面はなくとも、局部的基準面へと物質が運搬されてゆく平坦化



作用は想像できる。月の創生が地球と同様に古く、その風化侵蝕の速度が著しくおそいのであろうか。月の内部は地殻の基底層にあたる流動性を示す部分も流動体の核もなく、褶曲運動や大陸乗移もないと考えられているから、創生期の原地形がそのまま今に至っているとみる人もいる。地球上では100万年前の火山形は破壊し尽されてしまっている。その侵蝕速度が月で100倍の時間がかかるとしても1億年(中生代)この方の地形となって、創生期に比すれば新しい時期である。望遠鏡による月面の観測によると発煙現象や発光現象の記録がこれまでに何十例とあり、火山活動の存続を信じている人もある。地球より古い地形が新鮮なままあるとしても、又、真に新鮮な地形があり得るとしても、正しく驚異的なことである。

I.C.B.M.の発達が宇宙ロケットを産み、米・ソの膨大な軍費予算は痛を削る宇宙競走となって、国力の示威が戦争という殺伐な方法におきかわる様な時代である。その副産物をせいぜい味得できるのが、食しい国にいる食しい者の幸福とでも云えるのではなからうか。

( June 10/1965 )

## お茶大のイメージ

正井 泰夫

僕の生れは文京区小日向台町である。空襲で焼けるまでそこに住んでいた。お茶大のことは直接間接聞き及んでいた。当時はまだ女高師とっていたが、僕のような頭の回転のにがい男にとっては、それが東京女子高等師範学校の略称であることに気づくまで相当の日月を要した。

小日向台町は周囲を商店街でとり囲まれた住宅地であった。女高師は壘町方面の商店街地区に正門があったので、母はそっちの方へ行ってはいけなとよくいていた。また、母は時々「お茶の水を出たオえん」という言葉を使っていたが「オえんとは、一般婦女子の劣等観から生じた「オ猿」という意味の悪口かと思っていた。

中学校は高師村属中(現在の教育大付属中高)であったが、そこで女高師というのは主として女高師村属高女を指していた。僕にとってはほとんど関心外のことであったが、中には毎日のように「女高師」の正門の扉を姿勢・服装を正して歩く友だちもいた。だがそのために斜視になった級友もいたと